

日本語と日本文学

既刊号掲載論文一覧

(第1号～第51号)

第1号(昭和56年6月)

- 「くに」の語源……………馬淵 和夫
「聖家族」試解……………西原 千博
山上憶良嘉摩三部作の成立……………岡内 弘子
——「紅の面の上に」を中心として——
記録体における形式名詞「由」……………小川 栄一
同音語の用法……………吉村 弓子
——「温かい」と「暖かい」——
西尾実国語教育論の探求……………桑原 隆
——島木亦彦の教育論との関係について——
日・タイ語のテンスとアスペクトの対照および教授法に関する一考察
……………ラッチャニー・ピヤマーワディー

第2号(昭和57年11月)

- 一つの読み……………伊藤 博
——遣新羅使人たちの悲別贈答歌について——
源経信と遁世者……………仁平 恭治
——『撰集抄』における経信像——
「小チャイ」考……………吉見 孝夫
「水が飲みたい」・「水を飲みたい」式表現の用法差……………小川 栄一
——室町期の状態——
語頭の位置にある否定的な意味をもつ造語要素「無・不・未・非」の意味と
使われ方……………サトー・アメリカ、川崎晶子、ソーニア・ロンギ
日本語・マレイシア後におけるヴォイスの比較対照研究……………加納千恵子
——日本語教育の立場から——

第3号(昭和58年11月)

- 日本語文化をになった人の、ある系列……………林 四郎
斎藤茂吉「おひろ」の連作……………小倉真理子
——「死にたまふ母」との関連から——

『多武峯少将物語』考	下西善三郎
——高光の作中呼称と作者のめざしたもの——	
情態修飾成分の整理	矢澤 真人
——被修飾成分との呼応及び出現位置からの考察——	
複合動詞の意味と構成	田辺 和子
——「～ダス」・「～アゲル」を中心に——	
国語教材論研究の課題と方法	桑原 隆

第4号（昭和59年12月）

新撰万葉集と菅原道真	山崎 健司
——上巻における和歌と漢詩の或る場合——	
玉鬘十帖の方法と成立	川島 絹江
——玉鬘の運命と和泉式部、そして妍子——	
コナタ・ソナタと述部待遇語句の呼応	伊坂 淳一
——狂言台本とキリシタン文献を総合する観点から——	
文雑考——国語教育への展望とともに——	湊 吉正
問答文における主語のあらわれ方	小口 叔枝
表現型とアスペクト	青山 文啓

第5号（昭和60年11月）

比喩文における語の相互関連度の測定	芳賀 純
——隠喩と直喩の比較——	
七夕独詠歌論——大伴家持の漢詩文受容——	田中 大士
『虞美人草』論——詩人・小野の造型——	橋川 俊樹
版本狂言記の「おりやる」と「おぢやる」	大倉 浩
——詞章整理のあとづけ——	
日本語「スル」動詞と韓国語「hada」動詞の対照的研究	李 光秀
漢字基底語の現代における位置	吉村 弓子
文学教育における主語指導の有効性（上）	高木まさき

第6号（昭和61年11月）

〈寺〉を持つ作品群——明治三十九年の漱石——	平岡 敏夫
汗端能振の訓	鈴木 武晴
紀貫之の季節感	加藤 幸一
三島作品における〈妹〉	小林 和子
助動詞の語形変化と活用形	坪井 美樹
——中世後期を中心として——	

池袋児童の村小学校における峰地光重の綴方教育……………	山本 茂喜
談話におけるトピックの転換と一貫性について……………	堀越 喜晴
——手話の談話分析を通して——	
取立て助詞「ダケ・バカリ・シカ」の一考察……………	呉 雅琴
——中国語の副詞「只」との対照——	

第7号（昭和62年6月）

「行ふ尼なりけり」考……………	北原 保雄
——その文構造と意味——	
和泉式部日記の「をかし」をめぐって……………	前橋 均
『雪国』論……………	申 礼淑
——島村と駒子の関係を中心に——	
『人間失格』論……………	三谷 憲正
——「手記」と「あとがき」の〈時のしくみ〉をめぐって——	
日本語文における〈再帰性〉について……………	天野みどり
——構文論的概念としての有効性の再検討——	
説明付加型の連分の構造と機能……………	土井 真美
伝統修辞学と古典修辞学……………	柳沢 浩哉
——アメリカのインベンションにみられる伝統修辞学の影響——	

第8号（昭和63年1月）

下総犬と三浦犬……………	森野 宗明
——『古今著聞集』の三浦義村・千葉胤綱口論の説話をめぐって——	
総題を掲げる歌群……………	朝比奈英夫
——大伴家持論序説——	
「和泉式部百首」考……………	小林 恵
——恋歌を中心に——	
「羅生門」再読……………	高木まさき
古典作品における要求表現の諸形式……………	柴田 敏
——命令形＋終助詞の各形式について——	
名詞の意味的特徴……………	堀 蒼子美
——形容詞から派生した名詞の意味的特徴から——	
説明的文章の読解指導論……………	寺井 正憲
——認知的側面からみた形式主義・内容主義の検討——	

第9号（昭和63年9月）

「日本語と英語のモダリティに関する計量言語学的対照分析」……………	草薙 裕
-----------------------------------	------

源氏物語の中における朗詠と歌謡	青柳 隆志
近世中期勅化本と草双紙	山下 琢巳
——その影響関係について——	
ある三島由紀夫像	小笠 裕二
——〈菊田次郎もの〉をめぐって——	
日本語における受動文の意味的特徴	李 成圭
——漢語動詞を対象にして——	
国語教育における読者論の射程	上谷順三郎

第10号（昭和63年12月）

川端康成『千羽鶴』における人称詞	相原 林司
世阿弥自筆能本における登場人物の役表記をめぐって	飯塚恵理人
有馬皇子自傷歌二首	三田 誠司
「ひかりの素足」から「銀河鉄道の夜」へ	横山 明弘
——宮沢賢治における地獄を中心に——	
取り立て助詞「ハ」の対比の条件	市川 保子
——「花子がコップは割った。」は何故おかしいか——	
疑似命令文	山岡 政紀
——日本語モダリティの文法化の一事例——	
学校教育における話しことば教育の存立	安 直哉
——教育課程全体へ融合した指導の有効性——	

第11号（平成元年6月）

大正初期の随意選題の状況	高森 邦明
——保科孝一の紹介と諸家の実践——	
『とはずがたり』後編の起筆	寺島 恒世
——巻四冒頭部の意味と機能——	
小学館本『住吉物語』の本文の素性	岡崎 和彦
大鏡の待遇表現の考察	金 仁珠
——待遇主体の評価的態度をめぐって——	
主題省略の再生メカニズムにおける日本人と外国人日本語学習者の相違	平川 八尋
現代日本語における「話題主」と「聞き手」の上下関係が	
話し手の敬語表現に及ぼす影響	鄭 惠卿

第12号 (平成2年2月)

- 出版取締りと西鶴の方向転換……………谷脇 理史
——『好色一代女』の危険度——
没理想論争における鴉外と E.V. ハルトマン ……………坂井 健
「蜃気楼」の構造——風景の構図から—— ……………単 援朝
ソシュールの記号学にみられる二つのアスペクト……………戸田 功
——国語教育学における文化論的視座として——
韓国・日本漢字音における重韻の問題……………黄 光吉
韓国人の日本語学習者の音声教育に関する研究……………李 炯宰
——発音および聞き取り上の問題点を中心に——

第13号 (平成2年10月)

- 『大鏡』兼通伝・兼家伝を読む……………桑原 博史
謡曲『娼捨』における老女と月と……………金 忠永
——本説の検討を通しての本曲の主題の解釈をめぐって——
(終了)の意味と自他の形態……………須賀 一好
——他動詞形用法に接近した自動詞形用法の分析——
『譬え』による議論の修辞学的分析……………香西 秀信
比喩の意味における喩辞と被喩辞の相互関係について……………李 徳奉
場所的存在の表現をめぐって……………阿部 博幸
——日・英・中の比較による‘場所的存在’と‘所有’‘所在’との関係——

第14号 (平成3年2月)

- 「とはずがたり」の時代と人物……………河北 騰
『伏屋の物語』と『住吉物語』……………岡崎 和彦
——明応本の改作をめぐって——
山岸荷葉の一人称小説……………早川美由紀
——子供の視点の発見——
顕現していない格成分の解釈について……………高本 條治
——連文における解釈の場合——
生産物および用具に関する基本語彙の対照……………高田 誠
物語文のテキストにおける内容と述語形態とのかかわり……………野村美穂子
——『蜘蛛の糸』を中心に——

第15号 (平成3年12月)

- 『平家物語』の本文批判……………小西 甚一
——水平伝承と垂直伝承——

平安朝の朗詠常用曲	青柳 隆志
読みにおける子どもの脈絡と大人の脈絡	高木まさき
複合名詞のアクセント	崔 聖玉
——N1、N2 がともに 2 拍以下の場合 ——	
韓国人の日本語学習者の誤りの評価	趙 南星
——日本語話者と韓国語話者による誤りの重み付け——	

第 16 号 (平成 4 年 2 月)

観念としての「理想(想)」	坂井 健
——鷗外「審美論」における訳語を中心に——	
谷崎潤一郎「女人神聖」論	西 莊保
——「女人」をめぐる——	
自他対応の意味的類型	三井 正孝
「白いぼうし」試論	山本 茂喜
——あいまいさの構造——	
正義原則と類似からの議論	香西 秀信
日本語における長音節の形成とその歴史的意味	高山 知明
——とくに和語の促音、撥音について——	
程度副詞の体言修飾について	張 麗群
情報の縄張りから見た対話の構造	中園 篤典
——聞き手の相づちを中心に——	

第 17 号 (平成 4 年 9 月)

江戸中期における〈熊野の本地〉の継承と断絶	山下 琢巳
——黒本・青本『五衰殿熊野本地』と勸化本『熊野権現靈驗記』を めぐって	
防人検校時の家持歌	阿部 りか
『奔馬』論	
——「神風連史話」を中心に——	
古典教育の意義に関する一考察	許 昊
アメリカの作文教育におけるコンピュータ教育の可能性	浅田 孝紀
モダリティという観点から見た「ようだ」と「らしい」の違い	入部 明子
韓国人学習者の日本語の丁寧表現に見られる韻律的特徴	金 東郁
状態表現の「ル」形と「タ」形	洪 珉杓
——両形式の意味とその近似性——	

第 18 号 (平成 5 年 8 月)

- 『守覚法親王百首』本文考 ……………千草 聡
話者自身の経験に対して使われた〈けむ〉について……………宮武 利江
大学の講義における接続の表現……………金久保紀子
日本語と韓国語の漢語動詞……………辛 碩基
外国語音と現代日本語音韻体系……………松崎 寛
助詞を省略した文における発話……………守時なぎさ
時間とピッチの特徴
蘆田惠之助『綴り方教授法』に関する史的考究……………渡部洋一郎
——指導理論の実際とドイツ作文修辭法・四階級説の系譜——

第 19 号 (平成 5 年 10 月)

- 『雲母集』の「新生・序歌」に関する一考察 ……………小倉真理子
『行人』論 ……………稲垣 政行
——一郎の発見、そして一郎の求めた世界へ——
『檜垣』の老女をめぐる ……………金 忠永
——「水を汲む」所作から捉えられるシテ像の考察——
『朗詠要抄 因空本』考 ……………青柳 隆志
山上憶良の表現の独自性……………村田カンナ
——「うちなびき こやしぬれ」をめぐる——
いわゆる形式名詞に関わるモダリティ……………金 玉任
——ノダを中心に——
アスペクトと局面動詞……………呉 鍾烈
逆接のレトリック……………香西 秀信

第 20 号 (平成 6 年 9 月)

- 建暦・建保前半の藤原家隆の一面……………名子喜久雄
——「内大臣家百首」・「内裏名所百首」を中心として——
『鎌倉大草紙』から御物絵巻『をくり』へ……………木村 晃子
——小栗譚の発生と形成——
吉野における讃歌の継承……………遠山 一郎
家持の「感旧之意」……………西 一夫
——池主に贈るほととぎすの歌——
漱石「方丈記小論」私注 (一)……………下西善三郎
名詞性をもつモダリティの不定形式について……………加藤 陽子
言語の指導を中心とした国語教育……………河原塚 努
——言語教育からみた生徒の理解力・表現力の育成について——

読みの正当性を支える根拠……………松本 修
——ジャック・デリダに見る読みの実践——

第 21 号 (平成 7 年 6 月)

飛鳥川の淵瀬……………杉浦 清志
——古今集九三三番歌の成立と受容——
『新勅撰和歌集』と後鳥羽院……………永田 初枝
——雑歌を中心として——
日本語のヴォイスの体系とプロトタイプ……………佐藤 琢三
単独形式化モダリティ……………金 東都
疑問表現における「の」の機能の一側面……………牧原 功
——前提との関わりを中心に——
転換を表す接続詞「さて」「ところで」「では」をめぐって……………甲田 直美
ハズダの意味と用法……………田村 直子

第 22 号 (平成 8 年 2 月)

『日本永代蔵』の神仏の表現と教訓性について……………石塚 修
『枕草子』における「いふべきにもあらず」……………若杉 俊明
——メタレベルに現れる清少納言の表現意識——
「おぼゆ」考……………柳 椿姫
——『源氏物語』を中心に——
日本語と中国語の第三者敬語における「親」・「疎」の働きの比較対照……………郭 俊海
——日本人と中国人大学生の言語調査を中心に——
「タメニ」の意味表出と構文的特徴……………于 日平
——複文に見られる時間関係と意志性について——
現代日本語での「の」の撥音の交替……………那須 昭夫
——音声上の特徴から見た撥音形の容認性に関する一傾向——
辞的成分と共起する副詞の計量的研究……………小池 康

第 23 号 (平成 8 年 8 月)

今昔物語集における【ただ [動詞] に [動詞]】型表現形式の運用法……………島田 康行
——その意味的特質との関連から——
『羅生門』論……………高橋 龍夫
——感性から論理へ——
「父母」を詠む歌……………阿部 りか
——天平勝宝七歳の防人歌をめぐって——
「カナ」「カシラ」に関する考察……………カノックワン・ラオハブラナキット

自動詞文における格の代換について……………	安 平 鐘
——「発生」と「移動変化」をめぐって、「あふれる」を中心に——	
『全一道人』の三濁点について……………	関 丙 燦

第 24 号 (平成 9 年 2 月)

「千世の雪」と「千世のゆかり」……………	加藤 幸一
——貫之集歌の本文異同と貫之の表現——	
機械主義と横光利一「機械」……………	日比 嘉高
文学教育におけるコミュニケーション・モデルの構想……………	上谷順三郎
ダケのスコープと文中における境界……………	安部 朋世
複合助詞「として」の諸用法……………	馬 小兵
必然系と可能系のモダリティ……………	田村 直子
——条件接続表現によるモダリティ形式を例に——	
現代日本語における三人称代名詞「彼(女)」に関する一考察	
……………ソムキャット・チャウエンギジワニッシュ	

第 25 号 (平成 9 年 8 月)

絵入版本『曾我物語』について……………	小井土守敏
——寛永頃無刊記整版と寛文三年刊本の挿絵の検討——	
『保元物語』崇徳院自筆五部大乘経の検討……………	山田 雄司
〈政治〉と〈文学〉の間で……………	斉藤 愛
——坪内逍遙『内地雑居未来之夢』の中の「外国人」像——	
「ないければ」から「なければ」へ……………	奥村 彰悟
——一九世紀における打消の助動詞「ない」の仮定形——	
国語教科書における地理的教材の変容……………	甲斐雄一郎
程度副詞と命令のモダリティ……………	林 奈緒子
行智と韓語……………	関 丙 燦
——大東急記念文庫蔵『諺文攷』『諺文解』を中心に——	

第 26 号 (平成 10 年 2 月)

ソウル大学図書館蔵・奈良絵本『秋の夜の長物語』……………	内田 康
——翻刻および紹介——	
小次郎法師の物語……………	魯 恵卿
——泉鏡花『草迷宮』論——	
帰国直後の永井荷風……………	日比 嘉高
——「芸術家」像の形成——	

安部公房『砂の女』論……………波瀾 剛	
——登場人物と「砂」、およびテキストとの関係をめぐって——	
接続助詞「が」の提題用法について……………亀田 千里	
終助詞「な」の機能……………秋山 学	
——発話様式の適切さに関する諸要素から見た一考察——	
可決・否決のストラテジー……………若野 恵	
——大学生の話し合い場面の会話分析——	
トイウの談話語用的役割……………守時なぎさ	
滑川道夫読書指導論における児童文化的視点……………足立 幸子	

第 27 号 (平成 10 年 8 月)

『万葉集』の仮名表記……………奥田 俊博	
——表意性を有する例を中心に——	
「堀河百首」における「相模集」の受容について……………渦巻 恵	
『浮雲』の中絶の問題をめぐって……………鄭 炳浩	
——〈意〉と〈形〉の狭間で——	
『三四郎』冒頭部における「ペーコンの二十三頁」のもつ意味と機能……………呉 俊永	
——『三四郎』論序説——	
古典典拠に言及する小説の語り……………下西善三郎	
——芥川龍之介『芋粥』——	
湯浅克衛文学と母胎としての「水原」……………南 富鎮	
——『カンナニ』を中心に——	
純粹志向の文学言説……………中根 隆行	
——佐藤一英「純粹童話」の提唱とその周辺——	
「文学」を理解させる「国語教育」とは……………石塚 修	
——西尾実の文学教育論と「比べ読み」を応用して——	
副詞一語文に関する意味と自然さの計量的研究……………小池 康	

第 28 号 (平成 11 年 3 月)

中臣宅守と敬語……………伊藤 博	
延慶本平家物語と長門本平家物語の本文……………名波 弘彰	
——「木曾最期」の物語言説の位相差をとおして——	
上代日本語の母音脱落とアクセント……………権 景愛	
——融合標示の手段としての両者の相関性——	
話し言葉における「トイウコトダ」の諸相……………加藤 陽子	
疑問文文末形式「否定辞+カ」の意味と用法	
……………カノックワン・ラオハブラナキット	

とりたて詞「まで」「さえ」について……………茂木 俊伸
——否定との関わりから——

第29号（平成11年8月）

坂上郎女の枕詞の性格……………白井伊津子
——家持の方法の前提として——
〈虚〉の文学から〈実〉の文学への凝視……………鄭 炳浩
——二葉亭四迷の文学論における「真理論」の成立の背景——
従軍文士の渡韓見聞録……………中根 隆行
——日清・日露戦争期の〈朝鮮〉表象と与謝野鉄幹「観戦詩人」——
野々宮の恋愛はなぜ実らなかったのか……………呉 俊永
——「ペーコンの二十三頁」から読み解く〈恋愛〉と〈学問〉——
谷崎潤一郎『魔術師』における浅草……………張 栄順
太宰治『待つ』の教材としての可能性……………山下 直
——内容と表現の接点への意識を喚起するための導入教材——
小砂丘忠義におけるプロレタリア教育の影響と「表現技術」指導……………飯田 和明
順接確定条件の論理構造……………安 善柱
連体詞「ある」の統語的位置……………松本 哲也

第30号（平成12年3月）

「君が代」考……………桑田 明
『趣味の遺伝』論……………呉 俊永
——「学問」に隠された「余」のエゴイズム——
日露戦後の〈自己〉をめぐる言説……………日比 嘉高
——〈自己表象〉の問題につなげて——
〈故郷〉を〈創造〉する〈引揚者〉……………波瀾 剛
——安部公房とシュルレアリスム——
焦点と主格補語の関係……………天野みどり
——談話資料による補語顕現率・焦点句形式調査から——
言い換え後置分析と後置表現の認定……………富樫 純一
連体修飾節における複合辞……………守時なぎさ

第31号（平成12年8月）

〈なまめく・なまめかし〉の意味……………小島 俊夫
延慶本『平家物語』の成親説話考（上）……………朴 恩姫
——怨霊譚を中心に——

書けない小説と〈書く〉決意……………	渡部 茂樹
——志賀直哉『和解』論——	
金史良文学に現れた白々教事件の影……………	南 富鎮
——「土城廊」・「太白山脈」・「海への歌」を中心に——	
大江健三郎の〈他者〉表象……………	趙 美京
——『青年の汚名』をめぐる——	
局面動詞について……………	呉 鐘烈
——「～始める」と「～出す」形の副詞的修飾成分との共起関係を 中心に——	
明治期の二人称代名詞「アナタ」「オマヘサン」「オマヘ」……………	房 極哲
——その諸形と性差との関わり——	
戦後期の国語教育目標における「習慣」と「態度」をめぐる概念……………	小久保美子
イギリスの言語教育における標準英語（Standard English）の 意味内容の変遷……………	中嶋香緒里

第32号（平成13年2月）

宗于集の本文系統……………	藤田 洋治
——時雨亭文庫二本を加えて——	
『元三大師御鬮諸鈔』考……………	大野 出
「鼻」におけるベルクソン哲学の陰影……………	高橋 龍夫
『蓑虫説』における「蓑虫」の意味……………	黄 東遠
異質な二つの語りと子供の〈独立〉の内実……………	李 志炯
——島崎藤村『嵐』論——	
モノの〈提題〉性……………	三井 正孝
——現代日本語の場合——	
授受動詞の意味論的研究……………	金 珉秀
——「もらう」「買う」「借りる」を中心に——	
カラ・ノデ節中の述語の「同時型スル形」……………	賈 朝勃
ノデ節、カラ節のル形とタ形について……………	神永 正史
ALLガイドラインの外国語カリキュラム史上における位置づけ……………	齋藤 亨子

第33号（平成13年8月）

後期江戸語敬語体系における言語行動の〈場〉……………	小島 俊夫
近世初期の法華経字音学における『韻鏡』の扱いについて……………	中澤 信幸
〈書き手〉の時間・顕在化する「今」……………	渡部 茂樹
——志賀直哉『和解』論——	
〈著者〉のパフォーマンス・尾崎紅葉「伽羅枕」論……………	馬場 美佳

三島由紀夫「ニオベ」論……………	天野 知幸
——フランス現代演劇ブームの距離をめぐって——	
〈指示副詞＋係助詞〉の諸形式について……………	柴田 敏
「AヲBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」……………	阿部 二郎
ヲ格句を伴う移動動詞句について……………	川野 靖子
——アスペクト的観点からの動詞句分類における位置づけ——	
授業「文法を考える」……………	安部 朋世
——「あいまいな文」と「文の不自然さ」の検討を中心に——	
昭和初期文法教育における「実用」と「知識」……………	森田 真吾
——橋本進吉『新文典』編纂の背景——	

第 34 号（平成 14 年 2 月）

川端康成の自然観	
——『雪国』をとおして——……………	金 采洙
後期江戸語敬語体系における〈あなた・おまへさん〉……………	小島 俊夫
後白河院と天狗	
——延慶本『平家物語』における天魔、魔縁、天狗を中心に——……………	朴 恩姬
太宰治の「十二月八日」と雑誌『婦人公論』をめぐって……………	李 顯周
『大鏡』の実名使用の表現効果……………	金 仁珠
日本語の複合格助詞「について」と中国語の介詞〈关于〉	
——その対応関係を中心に——……………	馬 小兵
「お吉殺しの場」（『女殺油地獄』）の修辞学的分析	
——説得力をコントロールする修辞技法——……………	柳沢 浩哉

第 35 号（平成 14 年 8 月）

前田夕暮・自由律短歌成立の背景……………	久留原昌宏
一九一〇年代の毒婦の芝居と谷崎の描く女性	
——「饒太郎」論——……………	張 栄順
〈涙〉の趣向・脚色の変容	
——『二人比丘尼色懺悔』論——……………	馬場 美佳
島崎藤村『子に送る手紙』における〈内〉と〈外〉	
——ジャンル区分の曖昧性に見え隠れするもの——……………	李 志炯
佐藤春夫『女誠扇綺譚』論	
——「私」と世外民の対話構造が意味するもの——……………	朱 衛紅
「超現実主義」からの出発	
——花田清輝「童話考」、「悲劇について」——……………	渡邊 史郎

『捷解新語』における音注配置の原理	
——日本語学習書としての規範性の解明を中心に——	趙 來喆
「せっかく」の意味と用法	
——「前提」との関わりを中心に——	呉 珠熙
「様態・付帯状況」の複合動詞の組み合わせ	何 志明
話し合い指導における教材化研究	
——談話理論による大村はま「話し合い指導の手引」の分析——	長田 友紀

第36号（平成15年2月）

婦人文芸雑誌『処女地』と島崎藤村	
——大正期の婦人雑誌および婦人運動における『処女地』の位相——	
.....	李 志炯
佐藤春夫における文明批評の方法	
——「魔鳥」論——	朱 衛紅
日遠の声調と清濁卓立表示について	中澤 信幸
「ヘルンさん言葉」再考	
——その特質とビジン性の検証——	金沢 朱美
情態副詞「セイセイト（清々ト）」の発生	
——抄物における「X字（原漢文）⇒XXト・ニ（抄文）」という	
表現法を通じて——	劉 玲
使役を表す「ようにする」「ようにさせる」	金 熹成
性差マーカ―の「自然さ」	
——小説中の会話文と実際の会話との比較——	Ruth Vanbaelen
名詞句内のとりたて詞「ばかり」について	茂木 俊伸
文章表現における題材の認識方法	
——文脈指示の機能に基づく意見文の分析を通して——	小林 一貴

第37号（平成15年8月）

『竹斎』の瘡氣療治	松本 健
成長の経路	
——「一つの脳髓」にみる小林秀雄の ^{フロンズエイジ} 〈青銅時代〉——	岡田 浩行
堀辰雄「聖家族」論	
——作中のラファエロの絵画をめぐって——	兪 在真
条件形式による注釈節の性格について	
——「～言えば」の分析を中心に——	亀田 千里
慣用句の意味を分析する方法	石田プリシラ

室町時代における漢字音の清濁

- 『玉塵抄』と『詩学大成抄』を中心に—— ……………李 承英
証拠性判断を表す副詞について
——「どうやら」と「どうも」を例に—— ……………張 根壽
小砂丘忠義の綴方教育、その「教育の事実」……………飯田 和明

第 38 号 (平成 16 年 2 月)

異装の女君

- 『有明の別れ』における主人公の造型—— ……………北田 久美
『去年の枝折』の再検討 ……………金 京姫
芥川龍之介「片恋」論
——チャップリン流行下における〈西洋の曾我の家〉表象から——
……………鷺崎 秀一
「詩劇」の試み
——「マチネ・ポエティック」、「雲の会」と三島由紀夫「邯鄲」——……………天野 知幸
韻律接中辞と左接性
——日本語オノマトペの強調語形成——……………那須 昭夫
イベント補部を量化する副詞的数量表現
——度数副詞と遊離数量詞の共通性——……………佐藤 香織
『かさこじぞう』（岩崎京子）を読む
——作品世界の一貫性をとらえる〈読み〉——……………山下 直

第 39 号 (平成 16 年 8 月)

- 菅原道真と「逍遙遊」……………谷口 孝介
『今昔物語集』本朝世俗部の仏教的背景
——卷二十八をめぐって——……………舩城 梓
山口素堂の漢詩文の特色について……………黄 東遠
島崎藤村「哀緑」論
——芭蕉の詩法と情死の境と——……………五十里文映
誇張表現としてのホド構文……………井本 亮
日本語とタイ語の現場指示
——「コレ」と「annii」の対照的な分析——……………Saranya Kongjit
「少しずつ」構文と進展の意味
——「動作の進展」と「変化の進展」——……………宮城 信
国語教科書における口語文体選択の契機
——『沖縄県用尋常小学読本』の編集方針について——……………甲斐雄一郎

第 40 号 (平成 17 年 2 月)

- 「高瀬舟」の語り …………… 松本 修
 柿本人麻呂の対句表現…………… 田中 真理
 『浮世物語』における〈話材〉の独立と浮世観 …………… 松本 健
 堀辰雄におけるアンリ・ボアンカレ受容
 ——「芸術のための芸術について」を中心に—— …………… 兪 在真
 太宰治「トカトントン」論
 ——磔刑の音に消される〈トカトントン〉の幻聴——…………… 巖 大漢
 死者の語りという戦略
 ——安部公房『変形の記録』論——…………… Ghosh Dastidar, Debashrita
 大江健三郎「狩猟で暮らしたわれらの先祖」論
 ——漂泊するわれらの先祖あるいは異族——…………… 宋 仁善
 明治 30 年代の小説における性差と文末表現 …………… 任 利
 所有物主語の受身文から持ち主への受身文への置き換えについて
 ——自然さの違いを生じさせる要因を中心に——…………… 褒 銀貞

第 41 号 (平成 17 年 8 月)

- ありふれた不幸を描く
 ——「玄鶴山房」——…………… 渡邊 史郎
 『今昔物語集』本朝世俗部の仏教的背景
 ——巻二十六をめぐる——…………… 船城 梓
 秋成発句における芭蕉の受容…………… 金 京姫
 せめぎあう明子 (平塚らいてう) 像
 ——〈煤煙事件〉のメディア言説を中心に—— …………… 呉 聖淑
 『三体詩幻雲抄』に見える擬音語・擬態語 …………… 劉 玲
 相互行為を表す副詞の構文と意味
 ——「互いに」類と「交互に」類について—— …………… 宮城 信
 青年期の少女の日記に書かれたナラティブ・ディスコースの
 分析による「書くこと」の意味の考察
 ——生涯発達のアプローチから——…………… 石田 喜美

第 42 号 (平成 18 年 2 月)

- 横島昭武伝記再説…………… 小林祥次郎
 景物と人事
 ——山部赤人の対句——…………… 田中 真理
 芥川龍之介「奇怪な再会」
 ——隠喩としての狂気——…………… 孔 月

《消費》と「モダンガール」	
——菊池寛『受難華』論——	申 河慶
「臣民」と「不逞鮮人」	
——今村栄治「同行者」に見る民族・移民・帝国——	柳 水晶

日韓名詞連結の対照研究	
——「N1 N2」形態の結合関係と「の / 의 (ui)」の介在傾向について——	
.....	洪 榮珠

第 43 号 (平成 18 年 8 月)

自然科学用語の意味転用	
——蘭学者の造語の中から——	木村 秀次
一休が「し」の字を書いたこと	
——〈本当の話〉という伝承——	松本 健
定住者のいない満州／「遅しき」朝鮮人	
——中野重治「モスクワ指して」の植民地表象をめぐって——	徐 東周
一八九六年のロンドン博物館附属動物園の猿たち	
——太宰治「猿ヶ島」にみる日本（人）表象——	王 盈文
野口雨情の教育観と「立体」の関わり	
——童謡作品「四丁目の犬」を一例として——	金田 啓子
韓国語の ul / lul 格連続現象について	
——日本語のヲ格連続現象との対照——	文 智暎

第 44 号 (平成 19 年 2 月)

「サフラヒヲハンヌ」の敬語性	船城俊太郎
「続後撰集」神祇部私見	
——その構成と歌道家の扱いを中心に——	名子喜久雄
〈立證〉と〈創造力〉	
——森鷗外「梶原品」論——	村上 祐紀
「転向」と「モダンガール」の終息	
——夢野久作『少女地獄』論——	申 河慶
太宰治・〈明るさを装う〉心構え	
——「十二月八日」論——	巖 大漢
「花ざかりの森」の成立背景	
——学習院における「貴族的なるもの」の位相——	杉山 欣也
岡倉由三郎におけるオレンドルフ教授法の受容の考察	金沢 朱美

『社会百面相』の文末形式に見られる性差	
——女性性・男性性の表出と言語形式の選択——	任 利
「のだ」文とテキスト構造	
——内容区分とまとまりに関連して——	俵山 雄司
日韓両言語における「否定一致現象」について	朴 江訓

第45号（平成19年8月）

山上憶良の叙述の方法	
——対句表現と指示語の関連——	田中 真理
〈滑稽小説〉から〈喜劇〉へ	
——尾崎紅葉『夏小袖』論——	植田 理子
森鷗外「佐橋甚五郎」試論	韓 貞淑
遠藤周作「アデンまで」論	
——留学体験と疎外されるという絶望——	李 英和
上下関係が会話管理に与える影響	
——情報提供の「～ですね」「～ですよ」を中心に——	生天目知美
中学校教授要目の成立過程における文章観	八木雄一郎

第46号（平成20年2月）

『和泉式部日記』成立試論	
——「源重之女集」「子の僧集」との関連をめぐって——	渦巻 恵
空海入定留身説話の形成に関する一考察	辻本 弘
記紀歌謡の対句表現	
——進行形式における時間と空間——	田中 真理
『本朝神仙伝』の「上宮太子」条をめぐって	
——太子戸解説及び穆王・黄帝説話との関連から——	馬 耀
都会病の有情滑稽	
——岩野泡鳴「浅間の霊」——	鷺崎 秀一
近現代における「推定」のモダリティ副詞の変遷	
——ドウモとドウヤラを中心に——	小池 康
否定述語と呼応する「しか」「以外」「ほか」をめぐって	朴 江訓

第47号（平成20年8月）

一人称による語りの可能性	
——泉鏡花「黒壁」「聾の一心」を中心に——	魯 恵卿
『今昔物語集』巻二十九と仏教	
——本朝世俗部の編纂意識をめぐって——	船城 梓

「彼の朝鮮行」が語るもの	梁	智英
朝鮮が再現した「満洲」		
——『東亜日報』新聞記事と金東仁		
「赤い山——ある医師の手記——」	柳	水晶
呉天賞「蓄」からみる〈恋愛〉と〈植民地近代化〉	呉	亦昕
三島由紀夫「十日の菊」における同一化への眼差し		
——〈見られる〉肉体の美学——	洪	潤杓
話し合い指導における学習過程上の困難点		
——状況的認知アプローチからみた事前・事中・事後指導——	長田	友紀
『春色梅児誉美』における否定助動詞の研究	中沢	紀子
平安中期のテアリ文における他動詞構文について	神永	正史
移動動詞の格表示とアスペクト形式との関係		
——韓国語との対照の観点から——	許	宰碩
日本語と中国語における使役起動交替		
——中国語の単音節動詞の場合を中心に——	崔	玉花
状態記述 2 次述部と「で」	李	昇祐

第 48 号（平成 21 年 2 月）

海人とか見らむ旅行く我れを		
——人麻呂羈旅歌の表現——	三田	誠司
作家出発期の鏡花		
——紅葉の添削とその影響を中心に——	魯	惠卿
「あの人」を問うこと		
——大江健三郎「みずから我が涙をぬぐいたまう日」——	服部	訓和
「ようだ／ようだった」「らしい／らしかった」における		
「主體的な側面」と「客観的な側面」		
——副詞との共起関係から——	金	惠娟

第 49 号（平成 21 年 8 月）

「和習」の淵源		
——『新撰万葉集』巻上の漢詩を中心として——	谷口	孝介
栗田山の梅		
——『みだれ髪』における梅の花の歌の意義——	福山	惠理
1930 年代論と『綴方生活』	飯田	和明
中世期末以降のテアル構文		
——狂言台本虎明本を主資料にして——	神永	正史

第 50 号 (平成 22 年 2 月)

『和泉式部日記』における「巖の中に住まばかは」の古歌をめぐって ……	渦巻	恵
幸田露伴『幽情記』の典拠考 ……	王	菁潔
紀貫之「袖ひちてむすびし水」の解釈 ……	隋	源遠

生態場における生態学的意味の生成

——第三段階：意志の形成段階における生成—— ……	岡崎	敏雄
馬場辰猪『日記』から見た『日本文典初歩』第 2 版の考察		
——成立および特色を中心に—— ……	金沢	朱美
時の状況成分と頻度の修飾成分との共起と語順について ……	彭	玉全

第 51 号 (平成 22 年 8 月)

大江匡房における中国文化の受容と変容

——『本朝神仙伝』と中国の仙伝類を中心に—— ……	馬	耀
川上眉山『ふところ日記』論		
——矜持としての〈美文〉—— ……	菅野	恵
一九二一年芥川龍之介の天津体験 ……	姚	紅
写真と物語		
——谷崎潤一郎「友田と松永の話」論—— ……	張	栄順